

二〇二六年度入学試験問題（第一回）

国語

（五十分）

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから17ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。。「」はそれぞれ一字と考えなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「浩一、起きる時間よー」

——十月。

なんだか今日は、起きるのがちよつとつらい。転校してから一か月、気を張って一度も休まずに学校に行っていたせいもあるかもしれない。

でも風邪をひいたとか、具合が悪いわけではなかった。なんとなく、いつもより少し気分が悪い、そんな感じだ。

前の学校にいたころは、こんなときどうしていただろうか。

もしかしたら休んでいたんだっけ……。

じゃあどうする？ 今日……。

「浩、どうしたの？ ちゃんと学校行けるの？」

お母さんが、少しだけ心配そうに、もう一度声をかけてくる。

「うーん……」

一瞬考えてから、すぐに起き上がった。

「……行ける！」

* トクベツキューカを使おうかと思ったけど、やっぱりや

めた。

こんなときに大切な一日を使うのは、もったいない。だって、一度使ったら終わりなのだ。これからどんな日が来るかわからないのなら、その日に備えたい。

もちろん本当に風邪をひいたりとか、体調を崩したりしたら、トクベツキューカとは関係なく休むことができるけど、今はまだ転校してきて間もないものもあるし、なるべく学校を休みたくなかった。

「そしたら早く支度してね、ご飯も食べて、忘れ物とかもないように」

「あっ……」

そう言われて、あることを思い出した。忘れ物というか、忘れていたことがあった。

今日は漢字の小テストの日だ。それなのに宿題をまだやっていない。

このままだと、テストの結果もまずいことになる。

どうしよう。やっぱりトクベツキューカを使って、学校を休もうかな……。

そしたら漢字の小テストも、ひとまず今日は受けなくて済むし……。

「浩、またどうしたの？」

「いや、えっと……」

^A お母さんが、またぼくの一瞬の迷いに気づいたみたいだ。どうしよう。トクベツキューカを使って学校を休むのなら、登校時間の前に決めなければならぬ。

だけど、トクベツキューカを使っちゃったら、もう好きなきに休めなくなってしまうから……。

「急いでご飯食べて、急いで学校行く！」

早めに学校に行って、宿題をすることに決めた。

それならテストにも、じゅうぶん間に合う。

そして、トクベツキューカを使わずに済むのだ。

やっぱりまだ、トクベツキューカを使いたくない、という一心で、急いで準備をした。

(中略)

「鳥海くんは、トクベツキューカをどんなことに使うつもりなの？」

——十一月。

今日は西方先生との、ちょっとした面談の日だ。最近転校してきたぼくのためだけに、おこなってくれたのだ。

「今のところは、ちょっと決まっていなくて……」

「そうだよ、前の学校には、こんな校則なかっただろうし」

「はい、とりあえずはまだ、とっておこうと思っ……」

「うんうん、それでいいと思うよ。ほかの子は、結構使っちゃってる子も多いみたいだね。友だちと遊びに行く日に使ったり、家族旅行に行ったり、なんとなく休みたいからって使ったり」

「そうなんですね……」

ぼくは、最初から家族の行事や、友だちとの遊びに使うつもりはなかった。

あくまで前の学校のときみたいに、体調的にも気分的にも学校に行きたくないな、と思ったり、何か嫌なことがあったりする日が来るまで、とっておこうと決めていたのだ。

でも今はもう、冬も近づいている。残り四、五か月で学校自体終わりを迎えてしまうことになるのだ。

「そしたら今は、学校での悩みごととか何かあるかな？」

西方先生が、話を交える感じで言った。ぼくが前の学校で休みがちだったのは、お母さんから伝わっているのだろう。

ただ、そう言われても、すぐにぴんときなかつた。

「悩みごと……」

今のところ、体調的な心配は特にない。

自分としても、びっくりするくらい元気に過ごしていた。

「うーん……」

それに、クラスメイトとの問題も特になかった。とてもうまくいっているし、既に仲のいい友だちが何人かいた。

*
中谷くんとも、前よりもたくさん話すようになって、最近、中谷くんもよく笑うようになった。

「なんだろう……」

ほかに悩みごとってあるだろうか。

最近の宿題も欠かさずやっている。勉強だって学校を休んでいないから、授業にもちゃんとついていけている。成績は前よりも大分上がっていた。

「悩みごと……?」

「いや、無理に悩みごとを探さなくてもいいけどね!」

ずっと頭をひねり続けていたばかりに向かって、西方先生が言葉を続けた。

「悩みがないならいいで、すごくいいことだと思うよ。先生安心しちゃったなあ」

西方先生が嬉しそうに微笑んだので、ぼくもなんだか嬉しくなった。

気にかけてくれている人がいるというだけで、安心できたのだ。

「でもきつと、生活はすごく変わったよね。秋田と違って、だいぶ違うことも多いだろうし」

「そうですね、秋田ではけっこう田舎のほうに住んでいたの、近くにクマが出たりもしましたし……」

「クマ!? それはすごいね、千葉でクマなんて見かけたことないよ。わたしが見たことあるのはクマンバチくらい」

「クマンバチ……?」

^C
ぼくがきよとした顔をしていると、西方先生が不思議そうな顔をした。言った。

「鳥海君、クマンバチ知らない? ハチの中ではすごく大きくて、クマみたいなでっかいハチのこと」

そこまで聞いて、気づいたことがあった。

「……もしかしてクマバチのことですか?」

「あつ」

今度は西方先生のほうが、何かに気づいたような顔をしたら。

「そういえばクマンバチって呼びかたは地域の方言って言ってたなあ。正式名称はクマバチだけど、関東はクマンバチって呼ぶことが多くて、他にも九州だとオオスズメバチのことを、クマンバチって呼んだりもすることもあるとも言っていたし……」

「はあ……」

言っていた、というのが誰のことを指しているのかわからないけれど、ぼくも初耳のことだった。

「まあ東北や秋田の中でも、クマバチとかクマンバチとか、色々言い方は分かれてるのかもね。わたしとしては、クマンバチって言うほうが、なんかかわいらしくていいけどなあ」

「かわいらしい……?」

クマバチをクマンバチと呼んだところで、かわいくならないか、西方先生は本気で思っているようだった。

そもそも、あのかい見た目を知っていたら、かわいいなんて思う要素は、一切ないと思うけど……。

「ねえ、そういえば鳥海君は、昔はクマンバチって、本当は飛べない虫と言われていたのを知ってる?」

「えっ?」

それがどういうことを意味しているのか、ぼくにはすぐにわからなかった。

「昔はあんなでっかい体に小さな羽でクマンバチが空を自由に飛んでるのって、科学的には考えられないことって言われていたんだって」

「そうだったんですか……」

知らなかった。でも言われてみるとわかる気もする。クマバチは、飛ぶには、あまりにもアンバランスな見た目をしているのだ。

西方先生は、指を一本立てて言葉を続ける。

「それでね、当時、クマンバチが飛べる理由として考えられた、あるお話がおもしろいのよ」

「あるお話……?」

ぼくが尋ねると、西方先生は、待っていましたというふうに、小さく笑ってから答えてくれた。

「飛べないことを知らないから、クマンバチは飛ぶことができる、って言われていたことがあったんだって」

「飛べないことを知らないから……」

「自分が同じハチの仲間で、自分だって飛べると思い込ん

でるから飛べるって、昔はそう言われていたんだって。おもしろいよね」

「飛べると思い込んでるから、飛べる……」

確かにおもしろかった。

いや、それ以上に驚きだった。

飛べないことを知らなくて、自分で思い込んでるから飛べるなんて——。

「まあ今は、本当の理由は科学的に解き明かされて、思い込みなんて関係ないってことがわかったんだけど、実際、そういう気持ちの部分って、とても大事なんだと思うな。自分のことをちゃんと信じていたら、できることってたくさんあるはずだから」

「信じていたら、できること……」

E そう言われて、気づいたことがあった。

ぼくは前の学校にいたときは、自分自身、体が弱くて学校を休むのが当たりまえだと思っていた。

だから、本当はもう少しがんばれば学校に行けるようなときも、なんか今日は無理だなんて、勝手に決めつけちゃって、かんたんに休んでいた。

でも今のぼくは、自分が元気だと思っている。

そして実際に、元気に毎日学校に来ている。

これも、トクベツキューカのおかげかもしれない。

いざというときに、とっておきのやつがある、と思うと、安心することができたのだ。

それから西方先生は、ある情報を付け足してくれた。

F 「クマンバチもこんな話を聞くとさ、かわいじやなくてかつこよく思えちゃうよね。そういえばクマンバチって、

見た目とは違って温厚な性格のミツバチの仲間らしいよ。オスにいたっては、針すら持っていないんだって」

「……西方先生、ハチに詳しいんですね」

「ううん、実はこれ全部、クラスの子に教えてもらったことなの。ほかにもミツバチの8の字ダンスのこととか教えてくれてね、トクベツキューカも、ミツバチの巣を探しに行くのに使っていたくらいだから」

「そうだったんですね……」

そういえば、クラスの中で、虫の図鑑ずかんを広げて読んでいた女の子がいた。一緒にいた女の子と、8の字を指で描かいていたこともあった。きっとそれが、ミツバチの8の字ダンスのことだったのかもしれない。

「うん。まだたくさん時間はあるし、クラスのいろんな子

と話してみてね。それぞれいいところがある子が、いっぱいいるから。……それじゃあ今日の面談はこれでおしまい。トクベツキューカも、いつでも使っているからね。もちろん、最後までとっておいてもいいし」

^G 西方先生には、ぼくの考えは見破られているようだった。

「それじゃあ気をつけて帰ってね、さよなら鳥海くん」

「はい、さよなら」

「また明日、学校でね」

教室を出て、廊下^{ろうか}を歩き始める。

それから一度立ち止まって窓の外空を見上げると、クマバチはいなかったけど、悠々^{ゆうゆう}と飛ぶ一羽の鳥がいた。

「……」

その姿を見つめてから、周りに誰もいないことを確認して、こっそり両手を広げてみる。

「ぼくは飛べる、ぼくは飛べる……」

一瞬、本気で心の中で思ってみたけど、全然体が浮き上がる気配はなかった。

「まあ無理だよな」

^H でも今は、なんだかとても気持ちがいい。

それだけで充分^{じゅうぶん}だった。

（清水晴木『トクベツキューカ、はじめました！』による）

【注】

* トクベツキューカ——浩の通っている学校には、一年に一日だけ、好きな日に好きな理由で学校を休める制度がある。

* 中谷くん——友人関係で落ち込んでいたクラスメイト。

問一 ―線部A「お母さんが、またぼくの一瞬の迷いに気づいたみたいだ」とあるが、「ぼく」はどのようなことを迷っていたのか。その内容として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア なんとなく気分が悪いので、トクベツキューカを使おうと思ったが、せっかく勉強した漢字のテストも受けない。
イ 宿題をどうにかしたいが、クラスメイトとまだ親しくないなので、誰に宿題についての質問をしたらいいかわからない。
ウ 宿題をやらずにとりあえず登校だけはした方がいいか、遅刻^{ちこく}してでも宿題を終わらせてから登校するべきなのか決められない。

エ 宿題をやっていないので、トクベツキューカを使って学校を休んでしまいたいけど、転校して間もないので、簡単に休みたくない。

問二 ―線部B「頭をひねり続けていた」とあるが、「頭をひねる」のここでの意味として正しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 物事に悩んで落ち込むこと
イ 疑問に思っ^て首をかしげること
ウ あれこれと考えをめぐらせること
エ 考えるために大きく頭を振^ふること

問三 — 線部 C 「ぼくがきよとした顔をしていると、西方先生が不思議そうな顔をして言った」とあるが、この時の「ぼく」と「西方先生」は、なぜこのような顔をしているのか。それぞれ説明しなさい。

問四 — 線部 D 「ぼくにはすぐにわからなかった」とあるが、「ぼく」がわからなかったことは、どのようなことか。その内容として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大きな体のクマンバチが、小さな羽でも空を自由に飛び回れること。
イ クマンバチは飛んでいるのに、本当は飛べないと言われていたこと。
ウ 今は飛んでいるクマンバチが、昔は飛ぶことができなかったということ。
エ クマンバチの話と今の自分とに、どのような共通点があるのかということ。

問五 — 線部 E 「そう言われて、気づいたことがあった」とあるが、「ぼく」は過去の自分について、どのようなことに気づいたのか。説明しなさい。

問六 ——線部 F「クマンバチもこんな話を聞くとさ、かわいいじゃなくてかつこよく思えちゃうよね」とあるが、なぜ「かつこよく思え」るのか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クマのように大きな体をしているのに、小さな羽で自由に飛ぶことができるから。

イ 科学的には飛べないはずなのに、努力の積み重ねによって、ついに飛ぶことを実現したから。

ウ 飛べる理由が解き明かされるまでは、自分を信じることで飛んでいると考えられていたから。

エ クマという名前が入っているが、温厚な性格のミツバチの仲間で、オスは針すら持っていないから。

問七 ——線部 G「西方先生には、ぼくの考えは見破られているようだった」とあるが、「ぼくの考え」とはどのようなものか。解答欄に合うように本文から五十五字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問八 ——線部 H「でも今は、なんだかとっても気持ちがいい」とあるが、「ぼく」はなぜこのように思ったのか。その理由を七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

A
アンパンマンが、「一見」人工知能的な存在である、というの^{*}は、やなせたかしが語るアンパンマンのアイデアの源からも自明^{*}です。というのも、人間ではない、無生物であるアンパンが「ひと」になるというアンパンマンのコンセプトは、「フランケンシュタインの怪物^{かいぶつ}」から来ているのです。

ある日、アンパンに生命が宿って、アンパンマンがこの世に生まれる——「実はお話の根底にはフランケンシュタインを意識しました」（『ボクと、正義と、アンパンマン』）。

暴走する人工知能であるフランケンシュタインの怪物の誕生をモチーフとしているため、アンパンマンは、絶対に暴走しない「お腹が減った人にアンパンをあげる」「困った人を助ける」という行為^{こうい}だけをプログラミングされた人工知能的な存在に見えます。

顔であるアンパンをすぐ替えても、その性格は維持^{いじ}され、継続^{けいぞく}される^{*}ところは、現在のクラウドコンピューティングそっくりです。

でも、アンパンマンは人工知能ではありません。

【１】、アンパンマンは、人間の「本性^{ほんしやう}」そのものです。遺伝子に組み込まれた本能をキャラクター化したものです。

その本能とは何か。まず、「お腹が空く子どもに、ご飯をあげる」本能です。子育てをする生きものの親は、後天的文化や教育とは関係なく、この本能を「必ず」持っています。鳥も哺乳^{ほにゅう}類も、必ず、です。この本能を持っていないと、子どもが飢え死^うにしまうからです。

やなせたかしは、戦地で人間にとって最も苦しいことは「お腹が減ることだ」と実体験しました。食べなければ死ぬ。人間もまた生きものだから当然です。だからこそ、やなせたかしは、人間にとっての不変の正義は「お腹が減った人にごはんをあげること」だと看破^{かんぱ}したわけです。その洞察^{どうさつ}が、アンパンマンというキャラクターに昇華^{しょうか}されました。

人間を含めた、子育てをする生きものはみな「お腹の減った乳幼児に、おっぱいやご飯をあげる」本能を持ち合わせています。アンパンマンの不変の正義とは、人工知能的な、後天的プログラムではないのです。生きものとしての本能がキャラクター化されたものなのです。

（中略）

さらにアンパンマンは「困った人を助ける」。こちら
実は、人間の中にある利他的な「本性」です。数多くの生
物学者が、集団で生活する「人間」という類人猿の一種に
は、直接遺伝的な関係がない相手に対しても利他的な行動
をとる本性がある可能性を論じています。『利己的な遺伝
子』（紀伊國屋書店 1976）ではリチャード・ドーキンス
が人間の利他性について言及しています。

困った人を助ける、という利他的な行動も、それが学習
や教育や文化であると同時に、集団で生活する人間とい
う生きものに備わった本性がおそらく関わっています。つま
り、こちらも流行り廃りではなく、どんな時代でも人間が
発現し得る行動なのです。

お腹が減って泣いている赤ちゃんにおっぱいを飲ませ
る。腹を空かせてヘトヘトになっている人にアンパンを食
べさせる。困っている人を助けてあげる。結果、赤ちゃん
がニコニコしたり、困っている人が楽になったりする。そ
れを見るだけで、私たちはちょっと嬉しくなります。つま
り「ポカポカする」（映画「それいけ！アンパンマン りん
ごぼうやとみんなの願い」よりアンパンマンの台詞）。

それこそは、集団で暮らし、子育てをする生きものを成

り立たせている本性です。アンパンマンは、そんな人間の
本性を、キャラクターにしたものなのかもしれません。

【2】文化を身につける前の乳幼児に愛されるのです。
なぜ、やなせたかしは、「見返りを求めず人助けをする」
という、人間にある普遍的な利他性を「アンパンマン」と
いう作品のかたちで結実できたのでしょうか。

それは、やなせたかしが「亡くなった愛する人」を鎮魂
し続ける「おくるひと」だったからではないでしょうか。

やなせたかしは、ものごころついたときから、愛する人
を亡くし続けました。5歳で父が亡くなり、7歳で母と別
れ、20歳で育ての父である伯父を亡くし、25歳で弟が戦死
しています。さらに、実の母の死にも、育ての母である伯
母の死に目にも、会うことができませんでした。

そんな失意の20代のときに出会った彼にとつての「生き
るよろこび」が、高知新聞社の雑誌『月刊高知』編集部で
出会った1歳年上の暢でした。すぐに恋に落ち、上京し、
結婚しました。暢は、やなせたかしが三越のサラリーマン
だったときも、独立したときも、漫画家として芽が出なかつ
たときも、その「さっぱりした気性」で支え続けました。

「冗談^{じょうだん}のわかる」暢は、いつもどこかでさびしさとかなしさを抱^{かか}えていたやなせたかしにとって「光」でした。アンパンマンのキャラクターの中ではあの明るくていたずらっ子の「ドキンちゃん」が妻だ、とやなせたかしは述^のべています。

その暢もまた、アンパンマンのアニメ化が決定した1980年代後半、余命^{*}いくばくもない末期ガンと診断^{しんだん}されてしまいます。その後、看護^{かんご}の甲斐^{かい}もあって「それいけ！アンパンマン」がアニメになり、映画化して大ブレイクするさまをやなせたかしと体験^{たいけん}できましたが、1993年、75歳で息を引き取ります。

やなせたかしは、70歳過ぎてまた「愛する人」を「おくるひと」となったのです。

やなせたかしは、暢が亡くなってからも20年にわたり、94歳で生涯^{しょうがい}を閉じるまで休まず創作活動^{そうさく}に励^{はげ}みました。アンパンマンを日本で最も人気のあるキャラクターに育て上げ、雑誌『詩とメルヘン』が休刊したのちも『詩とファンタジー』という雑誌をかまくら春秋社から刊行するなど、ずっと精力的だったように見えます。

なぜ最期^{*さいご}まで精力的だったのか。それは、幼いときから

ずっと、亡くなった愛する人をおくりつづけてきたからではないでしょうか。「アンパンマンのマーチ」の3番の歌詞を連想します。

〈時ははやくすぎる 光る星は消える だから君はいくんだ ほほえんで〉

時は無常^{むじやう}に過ぎます。光る星＝自分にとって大切な人は消えていきます。でも、いや、だからこそ、ほほえんでいく。この「君」とはだれか。やなせたかしに他なりません。

愛する人がいつどこでいなくなるか誰^{だれ}もわからない。ならば、出会った人全てに自分のありつたけを捧^{ささ}げよう。後悔^{こうごう}しないように。

やなせたかしが、若いときにさまざまな分野で「頼まれ仕事」を引き受けたのも、年老いてから無償^{むじやう}でご当地キャラクターをつくり続けたのも、出会った人の「困りごと」を助けよう、と思ったからです。そうすれば後悔^{こうごう}しない、自分も相手も「X」する。

やなせたかしの心からの利他^{りた}、目の前の人を助けようという視座^{*}は「アンパンマン」となり、その精神にだれよりも早く反応したのが、ほとんど教育を受けていない段階の乳幼児でした。知識^{おかし}に侵^{おか}されていないからこそ、乳幼児に

はやなせたかしの思想が伝わっているように思います。

亡くなった人を悼^{*いた}み、生きている人を助け続ける。やなせたかしは亡くなるまですつとアンパンマンでした。そして亡くなってからもずっとアンパンマンであり続けます。

^E彼の示した利他は、私たち人間の根っこにあるもので、乳幼児が最初に欲^{ほつ}するものだからです。

今日も、どこかでアンパンマンを呼ぶ声があります。赤ちゃんの、幼児の声です。

すると必ず飛んでくるはずです。やなせたかし「アンパンマンが微笑^{ほほえ}んで。

(柳瀬博一^{やなせひろいち}『アンパンマンと日本人』による)

【注】

*やなせたかし——アンパンマンの作者。

*自明——説明しなくてもそれ自体で明らかになるさま。

*コンセプト——構想。

*フランケンシュタインの怪物——メアリー・シェリーの怪奇小説『フランケンシュタイン』に出てくる怪物。
人造人間。

*クラウドコンピューティング——インターネットを通じてコンピューター資源を必要なときに利用できる仕組み。

組み。

*看破——みやぶること。

*洞察——物事の本質を見抜^ぬくこと。

*昇華——物事が一段上の状態に高められること。

*利他——他人の利益を考えること。

*言及——ある事柄^{ことがら}について話の中で取り上げて触れること。

*普遍——あらゆる物事に当てはまるさま。

*鎮魂——亡くなった人の魂^{たましい}を休ませること。

*いくばく——少しばかり。

*最期——命が尽^つきるとき。死にぎわ。

*視座——物事をとらえる際の立場や観点。

悼^{}み——人の死を悲しみ、なげくこと。

問一 ―線部A「アンパンマンが、「一見」人工知能的な存在である」とあるが、「人工知能的な存在である」ように見えるのはなぜか。その説明としてふさわしくないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア アンパンマンの無生物がひとになるという構想が、「フランケンシュタインの怪物」から来ているから。
イ 顔を替えてもアンパンマンの性格が維持されるところが、クラウドコンピューティングと似ているから。
ウ いつも笑顔で街の人々のために働くアンパンマンの姿が、止まることなく動作を続ける機械のようだから。
エ 暴走せずに人助けをするという行為のみが、アンパンマンにプログラミングされているように見えるから。

問二 【1】、【2】にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア だから イ つまり ウ または エ むしろ

問三 ―線部B「腹を空かせてヘトヘトになっている人にアンパンを食べさせる」とあるが、このアンパンマンの行動のも
とになったと考えられる、やなせたかしの体験とは何か。答えなさい。

問四 ―線部C「それこそは、集団で暮らし、子育てをする生きものを成り立たせている本性です。アンパンマンは、そんな人間の本性を、キャラクターにしたものなのかもしれません」とあるが、「そんな人間の本性」とはどのような「本性」か。解答欄に合うように本文から二十七字で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問五 ―線部D「この「君」とはだれか。やなせたかしに他なりません」とあるが、なぜ「君」が「やなせたかし」だと考えられるのか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いつもどこかでさびしさとなしさを抱えていたやなせたかしだからこそ、ほほえみを絶やさないようにしようと努めていたから。

イ 妻をはじめ愛する人の死をみおくってきたやなせたかしだからこそ、後悔しないように自分のすべてを相手に捧げられるはずだから。

ウ 時がはやく過ぎることを若いころから悟さとっていたやなせたかしだからこそ、この世界で暮らすすべての人に尽くすことができるから。

エ 若いときにさまざまな分野で「頼まれ仕事」を引き受けたきたやなせたかしだからこそ、出会った人の手助けをしようと思えるから。

問六

X

にあてはまることばを本文から四字で書き抜きなさい。

問七

――線部E「彼の示した利他」とあるが、やなせたかしは「アンパンマン」を通じてどのような「利他」を示しているか。二つ説明しなさい。

三

次の①～⑤の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ネンシヨウの実験をする。
- ② 判断をホリユウした。
- ③ ボウエイ本能を働かせる。
- ④ そろそろニユウヨクの時間だ。
- ⑤ 会長の座をシリゾク。

